

その声に胸打たれ、

励まされ、そして涙した

中島みゆきの

この一曲が私の人生を変えた



みゆきは工藤静香に新曲「鳥より」(12月2日発売)を提供したばかり。旺盛に創作を続ける

おどろおどろしい「怨歌」から人生賛歌まで、みゆきの生み出してきた歌はどれもが人間のありのままの姿を描き出している。振り返れば人生の岐路に立たされたとき、いつも彼女の歌が共にあった。

富良野に響いた「エレイン」

「富良野の家にある暖炉の前に腰かけ、パイロット盤のLPに針を落としました。外はマイナス30℃の雪景色です。そして「エレイン」が聴こえてきた瞬間、切々とした歌声に心を掴まれました」あれが、自分の人生にとって決定的な瞬間だった。こう語るのは、脚本家の倉本聰さん(86歳)だ。

中島みゆきは75年に「アザミ嬢のララバイ」でデビューして以来、45年間で550曲以上の歌を生み出してきた。その中には、誰もがそれぞれ胸を抱く「自分だけの一曲」がある。倉本さんが続ける。

生き抜く覚悟があるのか」と突き付けられた気持ちになりました」倉本さんは雪の降り積もる富良野の地で、とり憑かれたように「エレイン」を聴いた。北海道の厳しい自然の中、みゆきの歌は胸を打った。

「みゆきの、命を削るような声が強烈だった。必死に生きようとする彼女の歌声が、自分の境遇とも重なった。私はこの歌と共に、厳冬の富良野を過ごしました。そして春が訪れたとき、試練を乗り越えられたように感じたのです。その後、私はドラマ「北の国から」の脚本を書き上げました。今でも、折に触れて「エレイン」を聴き返します」「エレイン」を、かけがえない曲と推す人は多い。詩人で大阪文学学校の校長・細見和之さん(59歳)もそのひとりだ。「あの歌を聴いたのは、大阪大学に入学した80年でした。「エレイン」は

アルバム「生きていてもいいですか」に収録されていますが、ジャケットが真っ黒で、とにかくおどろおどろしかった。18歳だった私に、大人の深い闇を感じさせました。

私は「エレイン」に込められた、言いようのない怒りに引き付けられ、繰り返しレコードを聴きました。当時、私は学生運動がほぼ消滅した状況で、自己防衛を守る活動や、反核運動に参加していません。エネルギーを持て余し、自分がどんな道を進んでいけばいいのか、迷っていたのです。進路に悩み抜いた末、私は大学院へと進み、哲学研究者としての道を歩み始めました。行く当てもなく彷徨っていた日々、に寄り添ってくれたのが、「エレイン」だったのです。

ジュークボックスの記憶

その記憶を抱いたまま、大崎さんは高校卒業後、早稲田大学に進学する。「せつかく上京したのはいいものの、大学の講義は退屈で、東京の空気にも馴染めなかった。海外小説を部屋で読み漁り、悪友に呼び出されてはふらふらと雀荘や飲み屋へと向かう毎日でした。あの頃、新宿のゴールデン街に「無酒」という店があって、そこにジュ

元・北海道にも若手の歌手がやってきました。そこで拓郎が「こいつは凄いなぞ」とステージに上げたのが中島みゆきだった。彼女はフォークギターを片手に、ひとりきりで「時代」を歌い始めた。その鬼気迫る姿が脳裏に焼き付きました」

ークボックスが置いてあった。100円を入れれば、好きな曲が聴けたのです。そのジュークボックスに入っていたのが、「ホームにて」でした」

「ふるさとへ向かう最終に乗れる人は急ぎなさいと、やさしいやさしい声の駅長が、街なかに叫ぶ。この歌詞を聴いた瞬間、大崎さんの脳裏には、故郷の景色が浮かんだ。

倉本聰「エレイン」大崎善生「ホームにて」
木山裕策「誕生」